[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名　桐谷（笠原）麻美

本研究は自死遺族が死別後の日常生活を維持する方法を明らかにするため、日本において親、配偶者、きょうだい、子どもを自死で亡くした遺族が望む生活を回復・維持するために行う具体的な行動を把握することを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 自死遺族は、家族を自死で亡くしながらも望ましいと感じる生活を続けようとする。
2. 自死遺族は望ましいと感じる生活を続けようと試みるが、喪失感によって度々《望むように生活できず苦しい》状態に陥る。
3. 《望むように生活できず苦しい》状態からなんとか逃れようともがくうち、〈自分の気持ちを表現する〉〈自死にまつわる様々な事柄を再解釈する〉〈苦しさの原因を頭から追い出す〉〈特定の状況を避けるべく状況を操作する〉という、《望むように生活させてくれる行為が見つかる》。世間体などの理由で躊躇したりやる気にならなかったりした望むように生活させてくれる行為には、〈気持ちよさを感じる〉〈他者とのつながりの確認〉〈体調を管理する〉という《心と身体の調子を整える》ことで多少楽になって気力をやや回復してから踏み出す。
4. 望むように生活させてくれる行為がいくつか見つかると、遺族はそれらの《望むように生活させてくれる行為を組み合わせて活用する》ようになる。すると何度も戻ってくる《望むように生活できず苦しい》状態に対処できる機会が増し【望むように生活できる自分になる】。
5. 自死遺族の一部には、落ち着いて生活できるように感じ《死別と共存している》状態に至る遺族もいる。しかし苦しい状態が何度も戻ってくるような期間がどのくらい続くか、苦しさが弱まる日が来るのか、遺族には予測できない。

以上、本論文は、自死遺族が望ましいと感じる生活を維持するための個々の行為を把握し、行為同士の関係性を時間軸を考慮しつつ体系的に明らかにした。本研究はこれまで提供されてこなかった、自死遺族自身が利用可能な情報に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。